

実践まとめシート（２年次）

研究グループ	地域を発見探究	実践グループメンバー	石橋、鎌田、藤田
--------	---------	------------	----------

実践タイトル			
『地域資源を活用した防災学習が知的障害を有する高等部生徒に及ぼす効果』			
<p>I 問題と目的</p> <p>2011年に発生した東日本大震災から12年が経過した。南海トラフ地震等が想定される地震大国の日本において、近年は局地的な大雨による豪雨災害や連日猛暑が続く異常気象、弾道ミサイル落下の危険性等により、12年前よりも国や自治体、学校の災害対策が向上され、地域住民個々の防災意識も高まっている。</p> <p>2022年8月は、避難情報で最も高い警報レベル5「緊急安全確保」が弘前市9地区で発令される集中豪雨が発生し、本校生徒にも災害は身近なものであるという印象を与えることとなった。そのような中実施した1年次の実践では、豪雨災害についての学習を通して、自分の身を守るための行動や、災害時に地域住民のために働いている人材の存在について学び、地域資源（人的・物的）への気付きが確認できた。</p> <p>2年次の実践では、1年次に学んだ地域資源の活用に加え、災害ボランティア体験の機会を設定した。卒業後の充実した地域生活を目指し、生徒たちが、地域から守ってもらう・助けてもらうという受動的な観点だけでなく、自分が地域の一員として地域のためにできることを考えて行動する能動的な観点をもってもらいたいという思いがある。</p> <p>災害についての講義やボランティアの体験を通して、地域資源や住民同士が支え合う仕組みについて知り、生徒自身が地域のためにできることを探究することを目的とし、本実践を行う。</p>			
II 実践方法			
<p>1 対象生徒・学級・学習グループについて</p> <p>総合的な探究の時間における学習グループ、【地域の役に立つグループ】高等部1～3学年の生徒12名のうち、4回目の授業まで欠席せずに参加した11名を検証対象とした。日常的なコミュニケーションを口頭で行うことができ、卒業後は、一般就労や福祉就労（就労継続支援A型・B型）を目指している生徒たちである。</p> <p>2 実践の手続き</p> <p>実践は、総合的な探究の時間において、全6回の授業構成で行う。地域の防災を全体テーマとし、生徒の実態に応じて【災害から身を守るグループ】と【地域の役に立つグループ】の2グループに分け、各グループのテーマに応じた探究をする。</p> <p>検証対象である【地域の役に立つグループ】の生徒は、豊沢、唐沢、福和（2010）において実施しているアンケート項目を参考に作成した検証用アンケートを授業の事前事後で実施する。検証用アンケートは、授業全6回のうち、1回～4回（6月27日、6月30日、7月5日、7月7日）について、授業冒頭と授業後にそれぞれ実施、それぞれを検証データとし、分析に用いる。</p> <p>検証用アンケートの構成は、防災意識に関する設問、地域の人に関する設問、自由記述とし、設問1から設問6は1項目4件法で回答を求める（図1参照）。設問1～設問6の防災意識に関する項目は、検証アンケートに回答された数値の変化を比較する。</p> <p>また、講師との直接的なやりとりをした生徒（質疑応答・感想発表）と、その他の講義を聞いていた生徒に分けて数値の変化を比較する。設問7、8に関しては、分析者の主観的な解釈になることを避け、客観的な分析を行うために、フリー・ソフトウェアのKH Coder3を用いて回答欄へ記入された内容をテキ</p>			

ストマイニング（共起ネットワーク図、抽出語）で検証する。

加えて、質疑応答内容とアンケート記述内容との関連、まとめ発表時に向けて生徒が作成した発表資料から生徒の学びや思考の検証も行う。

<p>災害アンケート（授業前） 月 日 （ ） 年 名前</p> <p>○設問の①～⑥までは、あてはまる番号に○（まる）をつけてください。 ⑦、⑧は文字を書いて答えてください。書くことが苦手な人は、書かずに話をしても良いです。</p> <p>①あなたは災害がこわいですか？</p> <p>さいがい</p> <p>①全然こわくない ②あまりこわくない ③少しこわい ④とてもこわい</p> <p>②災害はすぐにでもやってきそうだと思いますか？</p> <p>さいがい</p> <p>①全然思わない ②あまり思わない ③少し思う ④とても思う</p>	<p>③災害によって、あなたや家族がけがをするかもしれないと思いますか？</p> <p>さいがい</p> <p>①全然思わない ②あまり思わない ③少し思う ④とても思う</p> <p>④あなたは災害対策をすれば、今よりも命が安全になると思いますか？</p> <p>さいがい</p> <p>①全然思わない ②あまり思わない ③少し思う ④とても思う</p>
<p>⑤防災学習で学んだことを教えれば、家族は今よりも対策をしてくれると思いますか？</p> <p>ぼうさいがくしゅう</p> <p>①全然思わない ②あまり思わない ③少し思う ④とても思う</p> <p>⑥あなたは防災学習で学んだことを、家族に教えてあげようと思いますか？</p> <p>ぼうさいがくしゅう</p> <p>①全然思わない ②あまり思わない ③少し思う ④とても思う</p>	<p>⑦災害の時に、どのような人たちが皆さんのために活動していると思いますか？</p> <p>さいがい</p> <p>⑧地域のために、あなたにできることや、どのように過ごしていきたいかなど、考えていることを書きましょう。</p> <p>かじょうが</p> <p>箇条書きでも良いです。たくさん書きましょう。</p> <p>⑨今日の授業でわかったことや感想を書きましょう。</p> <p>かじょうが</p> <p>箇条書きでも良いです。たくさん書きましょう。</p>

図1 検証用アンケート用紙

Ⅲ 指導の実際

1 「オリエンテーション」（6月27日）※事前事後アンケート実施

地域の防災を全体テーマとし、【災害から身を守るグループ】と【地域の役に立つグループ】のグループごとに分かれて学習内容の確認を行った。【地域の役に立つグループ】では、「災害のときや、日頃から、地域のために自分にできることは何か？」の問いを提示し、7月5日（水）に校外学習を行うなど、今後の学習スケジュールを確認した。その後、東日本大震災の被災経験がある教師から被災時の様子を聞き、災害時に地域を支えている人について考える機会を設けた。

2 「調査（災害ボランティアについて）」（6月30日）※事前事後アンケート実施

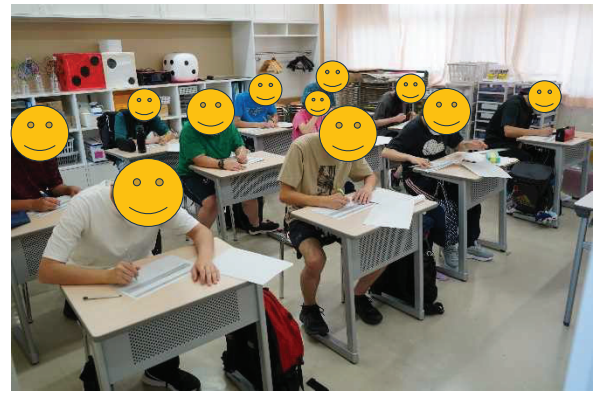
被災した教師の東日本大震災時における災害ボランティアの経験や、教師がボランティアに支えられた経験と関連付け、災害ボランティアについて調査する学習を行った。災害ボランティアはどのような活動を行うのか、必要な道具は何か、どこで登録手続きを行うのかなど、インターネットで情報を収集し、自分にできそうな災害ボランティアについて考えた。また、次時に実施する地域資源を活用した授業の事前の確認も行った。

3 「災害について考えよう」（7月5日）※事前事後アンケート実施

弘前市社会福祉センター（弘前市社会福祉協議会）において実施した。講師として、昨年度に引き続き青森県防災士会の職員、今年度は、新たに弘前市社会福祉協議会の職員の協力を得た。青森県防災士会の職員

より災害時の避難行動や日々できる備えについて、弘前市社会福祉協議会の職員より災害ボランティアについての講義を受けた後、災害ボランティアに関する体験活動（災害ボランティア登録用紙記入や、災害ボランティアの指示系統に沿ってダンボールベッドや間仕切りの組み立て等）を実施した。





4 「お礼状作成」(7月7日) ※事前事後アンケート実施

前時の講師 2 人へのお礼状を作成した。学年ごとのグループに分かれ、前時の授業から学んだことを話し合い、お礼状の内容を考え、タブレット端末を用いて作成した。

5 「調査したことを整理してまとめよう」(8月28日)

前時の後に夏休みに入り、期間が空いての学習となった。これまでの授業で用いたワークシートを確認し、タブレット端末を用いてまとめのスライドを作成した。まとめの観点として、①調査して分かったこと、②地域の一員として自分が日々できること、について、生徒たちがこれまで調査し学習した内容や感じたことをもとに自分の考えをまとめた。

6 「発表しよう」(9月5日)

【災害から身を守るグループ】と【地域の役に立つグループ】合同で、発表会を実施し、それぞれの生徒が調査し、探究した内容を共有した。

IV 結果

1 防災意識①

4回目の授業後までに実施した検証用アンケートの設問1から設問6までの数値を整理したものを図2に示した(少数第三位は切り捨てて算出)。授業ごとに、各生徒の事前・事後アンケートの平均値(a、b)と事後から事前の数値を引いた差(b-a)を算出している。各授業の差の平均以上の変動があった数値は、上昇を黄色、低下を青色で示している。また、地域人材に対して質問や感想発表等を行なった生徒名は赤字で示している。

地域人材を活用した7月5日では、授業後に数値が上昇した生徒が6名おり、うち5名が平均以上の上昇を示していた。また、授業前よりも数値が低下する生徒は確認されず、地域人材活用が、防災意識向上に有効である可能性が示唆された

生徒C・J・Kは、4回を通して事前・事後での数値の上昇が確認されなかった。生徒にとって防災学習の内容やアンケートの設問・回答の仕方に難しさがあったことがうかがわれた。

生徒A・E・Fは、6月30日(災害ボランティアについての調べ学習)、7月7日(講師へのお礼状作成)において数値の低下が確認された。低下した授業における生徒への動機づけが必要であったと考えられる。

生徒	(1)「オリエンテーション」(6月27日)※被災者の話を聞く(教師)			(2)「調査(災害ボランティアについて)」(6月30日)※調べ学習(災害ボランティア)			(3)「災害について考えよう」(7月5日)※防災士・社協職員講義ボランティア体験			(4)「お礼状作成」(7月7日)※お礼状作成(学年毎にグループを構成)		
	事前(a)	事後(b)	(b)-(a)	事前(a)	事後(b)	(b)-(a)	事前(a)	事後(b)	(b)-(a)	事前(a)	事後(b)	(b)-(a)
A	3.03	3.66	0.63	3.5	3.33	-0.17	2.5	3	0.5	2.83	3	0.17
B	2	2.66	0.66	1.83	1.83	0	2	2	0	1.83	1.83	0
C	2.83	3	0.17	3	3	0	3	3	0	3	3	0
D	3.66	3.66	0	3.83	3.83	0	3.5	3.83	0.33	4	4	0
E	3.33	3.5	0.17	2.83	2.83	0	2.33	2.83	0.5	2.83	2.33	-0.5
F	2.5	2.66	0.16	2.16	2.33	0.17	2.33	2.33	0	2.16	2	-0.16
G	3.5	3.83	0.33	3.5	3.66	0.16	3.66	3.83	0.17	3.66	3.66	0
H	2.83	3	0.17	3.5	3.66	0.16	3	3.33	0.33	3.5	3.5	0
I	2.66	3.33	0.67	2.16	2.5	0.34	2.83	3.16	0.33	2.33	2.5	0.17
J	3.16	2.66	-0.5	2.83	2.66	-0.17	2.66	2.66	0	2.66	2.66	0
K	3.33	3.16	-0.17	3.16	3.16	0	3.16	3.16	0	3.16	3.16	0
各平均	2.98	3.19	0.21	2.94	2.98	0.04	2.82	3.01	0.20	2.91	2.88	-0.03

図2 防災意識 ※少数第三位切り捨て

2 防災意識②

質疑応答や感想発表の場面で講師との直接的なやりとりをした生徒を「能動的関与」群(A、D、E、I、Kの5名)と、講義を聞くなど授業参加ができていたものの講師とのやりとりが直接できずにいた「消極的関与」群(B、C、F、G、H、Jの6名)とに分け、それぞれの平均値の変化を比較したものを図3で示した。能動的関与群は消極的関与群と比較して授業後の防災意識の上昇が確認された。これにより、地域人材との直接的なやりとりを重ねることが防災意識向上につながる事が確認された。また、質問をするなど、生徒の探究活動が意識向上につながる事が確認された。

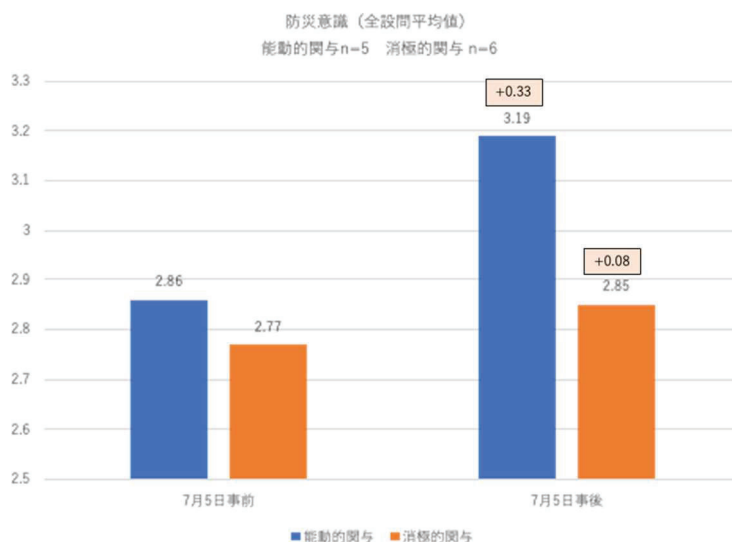


図3 防災意識(全設問平均値) ※少数第三位切り捨て

3 質疑応答・感想発表と自由記述内容との関連①(能動的関与群)

質疑応答・感想発表の内容と授業後アンケートの自由記述内容との関連について整理したものを図4で示した。検証した結果、自分が質問して回答を得た内容を授業での学びとして記述している生徒は確認されなかった。また、他の生徒が質問して回答を得た内容を、授業での学びとして記述する生徒が確認された。

生徒	防災士への質問内容	社会福祉協議会職員への質問内容	7月5日授業後アンケートへの記述
A	ボランティアをするために必要な資格はありますか？ 【回答】 ① ボランティアに資格は必要ない 。自分の得意とするところをボランティアしてほしい。	これ以外に組み立てる物がありますか？ (ダンボールベッドや間仕切り以外で) 【回答】 今日は体験のために組み立ててもらったが、実際に災害ボランティアにいった際にはごみ出し等が多くなる。例えば、災害で家に水や泥が入ってごみになったものを、家族や一人暮らしだと大変なため、ボランティアで応援に行ったことがある。中には壊れたものを直す依頼もあるが、どちらかと言えば少ない。	ボランティアの皆さんや自衛隊の方。津波が来る旗がある。色々な障害のマークがあることが分かった。② ボランティアに年齢制限は無い 。早めの行動が大事。ダンボールベッドは固い。固い。
	一番長持ちする食料はありますか？ 【回答】 力がつくのはご飯とかおにぎり、おもち。防災士は甘いようかんをもって。好きなお菓子を食べてと元気が出るため、チョコやナッツなど、自分の好きなお菓子を決めて、もっておいてほしい。		
D	ボランティアに年齢制限はありますか？ 【回答】 ② 年齢制限はない 。小さい子供でも、おじいちゃんおばあちゃんとか関わるボランティアもある。おじいちゃんもいる。自分の身体に合った得意とするところをボランティアしてほしい。		ボランティアの人達が色々な所から来て助けてくれる。旗(赤白)を振っている時は避難の合図。非常持ち出し袋が必要。
E	懐中電灯が必要だと思うが、電池が切れてしまったら予備とかあるんですか？ (避難の際、支給されるか) 【回答】 予備の電池は、もらえないと思う。そのため、予備の電池も準備して、リュックに入れて用意しておくとうい。		ベッドの作り方が分かりました。③ 三日分の食料が必要だと思いました 。みんなが優しいわけではないことが分かりました。
I	【感想発表】 「今日はお忙しい中時間をとっていただきありがとうございました。僕が分かったことは、災害の時に物を組み立てることが重要だと思ったので、もし災害にあったしたら、災害ボランティアに参加し、皆さんの役に立てようになりたいと思います。今日は一日ありがとうございました。」		警察。消防。自衛隊。防災の人。色々な人がいる。水や食料。甘いお菓子。ゲームを準備する。補助犬。救助犬。介助犬などがいる。
K	避難をしている時に水や食料がなくなったらどうすればいいですか？ 【回答】 避難所では水や食料が届く仕組みになっている。家で食料がなくなったら、避難所に配給されたお弁当をもらうことができる。避難所では、自衛隊の人が水を持ってきてくれたり、お風呂を用意してくれたりと、色々な援助がなされていく。③ 三日分の食料、水、お菓子等を準備しておくとうい 。四日目からは、市役所等、行政からの支給を受けられる。	用紙記入の際、分からないことは周りの人に聞いてもいいですか？ 【回答】 保護者の同意や個人情報も書くことになるため、災害ボランティアの係の人に聞くのが一番安全である。担当の人にどんな質問してほしい。	防災士。消防士。自衛隊員。ボランティア活動している人。津波フラッグの合図で高い所へ逃げる。障害者に関するマークの説明を詳しく教わったこと。避難をするときの生活を説明を詳しく教わったこと。避難をする時の持ち物を確認する。ダンボールベッドの組み立てやトイレの仕組みが分かったので、これからに生かしていきたいです。
	避難をしている際の、衣類の洗濯をするにはどうすればいいですか？ 【回答】 避難所では何日も同じ服を着ていないといけない時もある。避難所に洗濯機がない場合は、自分で手で洗って、決められた洗濯物干し場に干すことになることもある。親戚がいる場合は頼れると助かる。家族もいると思うが、自分で洗濯をしてほしい。		

図4 質疑応答・感想発表と自由記述内容（能動的関与群）

4 質疑応答・感想発表と自由記述内容との関連②（消極的関与群）

消極的関与群の生徒の事後アンケートへの自由記述内容を図5で示した。消極的関与群においても、他の生徒の質問に講師が回答した内容を、授業で学んだこととして授業後アンケートに記述している生徒が確認された。質問に対する地域人材の応答が、聞いている生徒の学びにつながる活動であることが確認された。

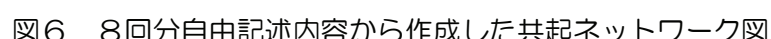
生徒	質問をしていない生徒の記述内容（7月5日授業後アンケート）
B	人を守るため。ベッドや壁の組み立てが大変だった。色々な種類の看板や非常時の荷物も大切だと思いました。
C	ボランティア活動をしてくれる人。色々なボランティアがいることが分かった。① ボランティアは資格は無いし②年齢は制限無し なことが分かりました。色々なマークがあることが分かりました。
F	防災士の人がダンボールベッドの組み立てをやってくれている。ダンボールの壁とベッドの組み立て方を覚えた。他には、色々なマークを覚えました。
G	沢山います。自衛隊。役所。避難所の人など。色々なマークを知りました。リュックに好きな物を入れる。自分でもできることをしたいです。人を助ける。リュックに準備するなど。今日、避難所の家具を作ってみて少しダンボールを組み立てるのが難しかったです。
H	防災士。ボランティア。赤白の旗は津波の合図。③ 防災リュックにお菓子を入れておくとうい 。薬がある時お薬手帳を持っているとうい。困っている人がいたら助けてあげるとよい。
K	ダンボールを使って色々な日用品を作っている人がいました。③ お菓子などの非常食 を持つ人がいました。津波フラッグを使って津波が来る合図の旗がありました。ダンボールでできた家具があってびっくりしました。少し勉強になりました。色々作れてとても楽しかったです。

図5 質疑応答・感想発表と自由記述内容（消極的関与群）

5 生徒の学びの広がり①（自由記述の共起ネットワーク図）

4回目の授業後アンケートまでの計8回分の自由記述内容（設問7、8）をフリー・ソフトウェア KH Coder3を用いて共起ネットワーク図を作成した。集計単位は文とし、出現回数2回以上の語を活用し、共起関係は上位120としている。強制抽出する語として、「防災士」「消防士」「自衛隊員」「モバイルバッテリー」を指定している。語と語のつながりを示す共起関係は線により表現され、線の太さによって共起の強さが示されている。また、バブル（語とともに表示される円）の大きさは抽出された語の量を示している。

【③自分ごと】では、主に防災士の講義や、災害ボランティア体験を通して得られた生徒の気づきを起点とした自分ごととしての思考の広がりが確認された。O1（青色）のサブグラフにおいては、多様な人の存在を示す「いろいろな」、「マーク」という語から「生活」につながり、災害時や日頃から自分たちにできることへと共起していることが確認された。O2（橙色）では、災害ボランティア体験を通して感じたことが「自分」の考えと共起していることが確認された。



本実践前のベースラインにあたる6月27日授業前の共起ネットワーク図を図7で示した。サブグラフに属さない災害、避難を中心に5つのサブグラフが構成され、【01:準備】【02:行動】【03:情報】【04:避難】【05:地域の人】とタイトルをつけることができた。

図7と比較して変化が顕著であるなど特徴的なものを抽出する。「災害について考えよう」(7月5日)として防災士・社会福祉協議会職員の講義やボランティア体験を行った直後にあたる、7月5日授業後の共起ネットワーク図を図8で示した。7つのサブグラフが構成され、【01:災害への備え】【02:人】【03:ボランティア】【04:体験した内容】【05:いろいろなマーク】【06:避難】【07:津波】とタイトルを付けることができた。【01:災害への備え】【03:ボランティア】【05:色々なマーク】【07:津波】の内容は、授業前半の防災士の講義から生徒が学習した内容であった。【04:体験した内容】は、社会福祉協議会職員の講義やボランティア体験を通して生徒が学習した内容であった。【02:人】【06:避難の内容】は防災士と社会福祉協議会職員の両方の講義に含まれる内容であった。内容を整理すると、①講義や質疑応答、体験活動を通したボランティアに関する知識の広がり、②いろいろなマークの学習を通した多様な人の存在の意識、③災害時に必要な行動や知識の広がり(災害に応じた避難行動、災害時の備えなど)が確認された。

さらに、図8での学習の定着程度を確認するため、7月7日授業前の共起ネットワーク図を図9で示した。【01:いろいろなマーク】【02:避難】【03:ボランティア】【04:防災グッズ】の4つのサブグラフと【人】【テレビ局】【高い】【準備】のサブグラフに属さない語から構成された。7月5日授業後の共起ネットワーク図と比較してみると、前時で学習した内容を生徒たちが想起できていることが確認された(01、04のサブグラフは防災士の講義より学習した内容、03は社会福祉協議会職員の講義より学習した内容)。生徒が学習内容を想起できていることにより、防災意識の低下が抑えられていることとの関連性が示唆された。

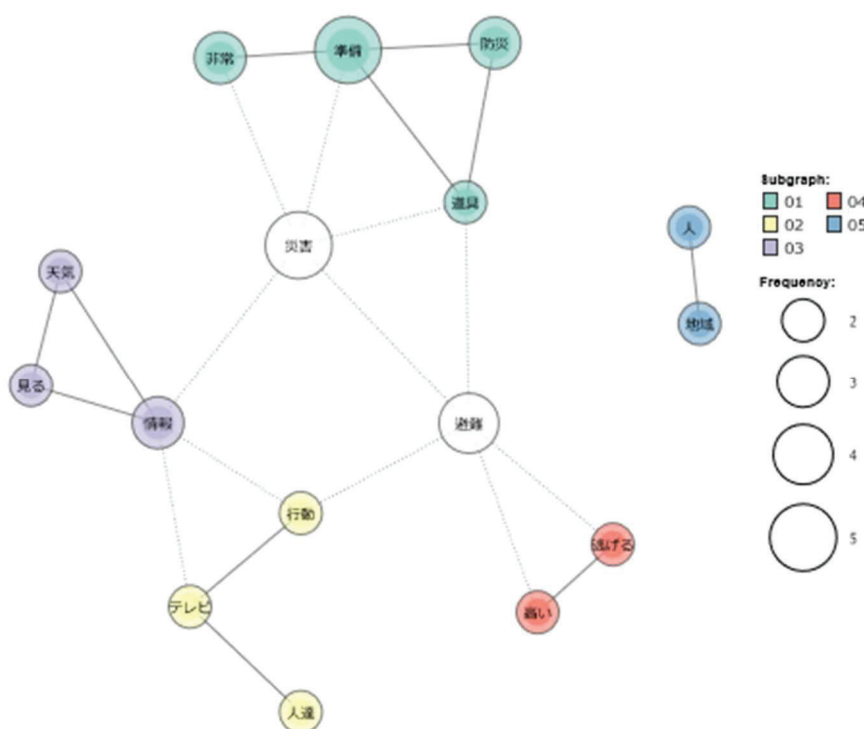


図7 6月27日授業前(本実践開始前)の自由記述内容から作成した共起ネットワーク図

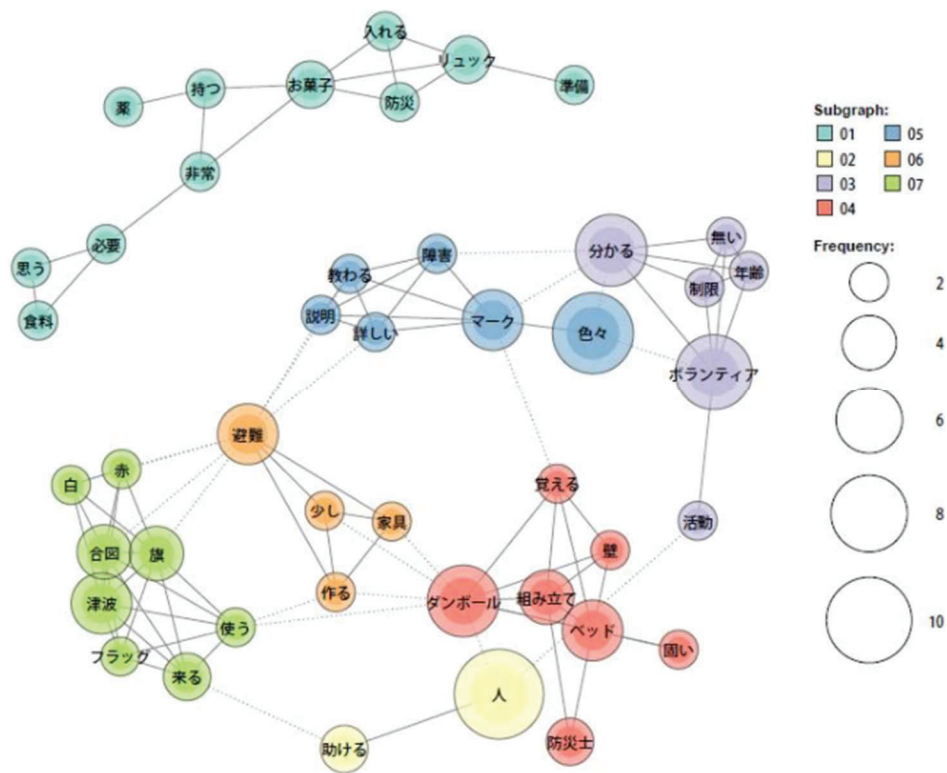


図8 7月5日授業後（地域人材活用授業後）の自由記述内容から作成した共起ネットワーク図

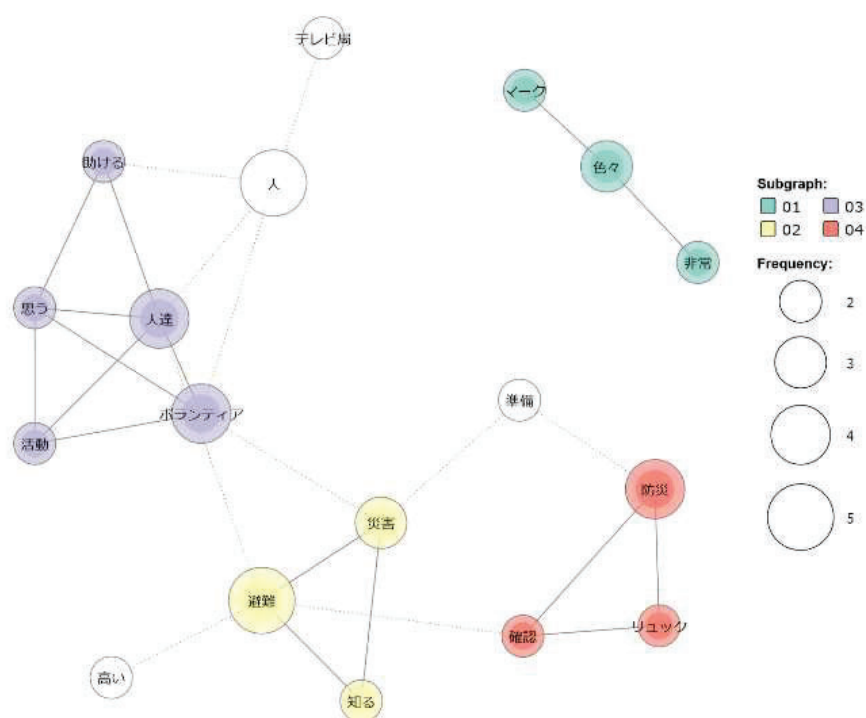


図9 7月7日授業前の自由記述内容から作成した共起ネットワーク図

6 生徒の学びの広がり③（自由記述内容からの抽出語）

4回目の授業後アンケートまでの計8回分の自由記述内容（設問7、8）をフリー・ソフトウェアKH Coder3を用いて抽出した上位150語のうち、5語以上抽出されたものを図10に、カテゴリ分類したものを図11に示した。6つのカテゴリとその他に分類することができ、災害に関する語（避難、災害等）よりも、人に関する語句（人、ボランティア等）が多く抽出された。学習を通し、自分を含む人や機関（テレビ局、役所等）への視点の広がりが確認された。行動面での記載からは、自分がどのように行動すればよいかを思考していることが確認された。思う、分かるなど、生徒が授業での気づきを思考や理解につなげていることも確認された。

また、地域人材活用授業前後（7月5日）に実施したアンケートの自由記述内容（設問7、8）をフリー・ソフトウェアKH Coder3を用いて抽出した上位150語のうち、2語以上抽出されたものを図12、図13に示し、比較した。授業前後での比較を通し、記述量が増加し、抽出語も増加していたことが確認された。人、ボランティア、いろいろな、マーク、障害など、多様な人への気づきを確認された。防災士の講義（様々なマーク、災害への備え、津波フラッグなど）、社会福祉協議会職員の講義（ボランティア等）、体験活動（ダンボールベッドの組み立て等）を通し、生徒が学びを得たことが確認された。

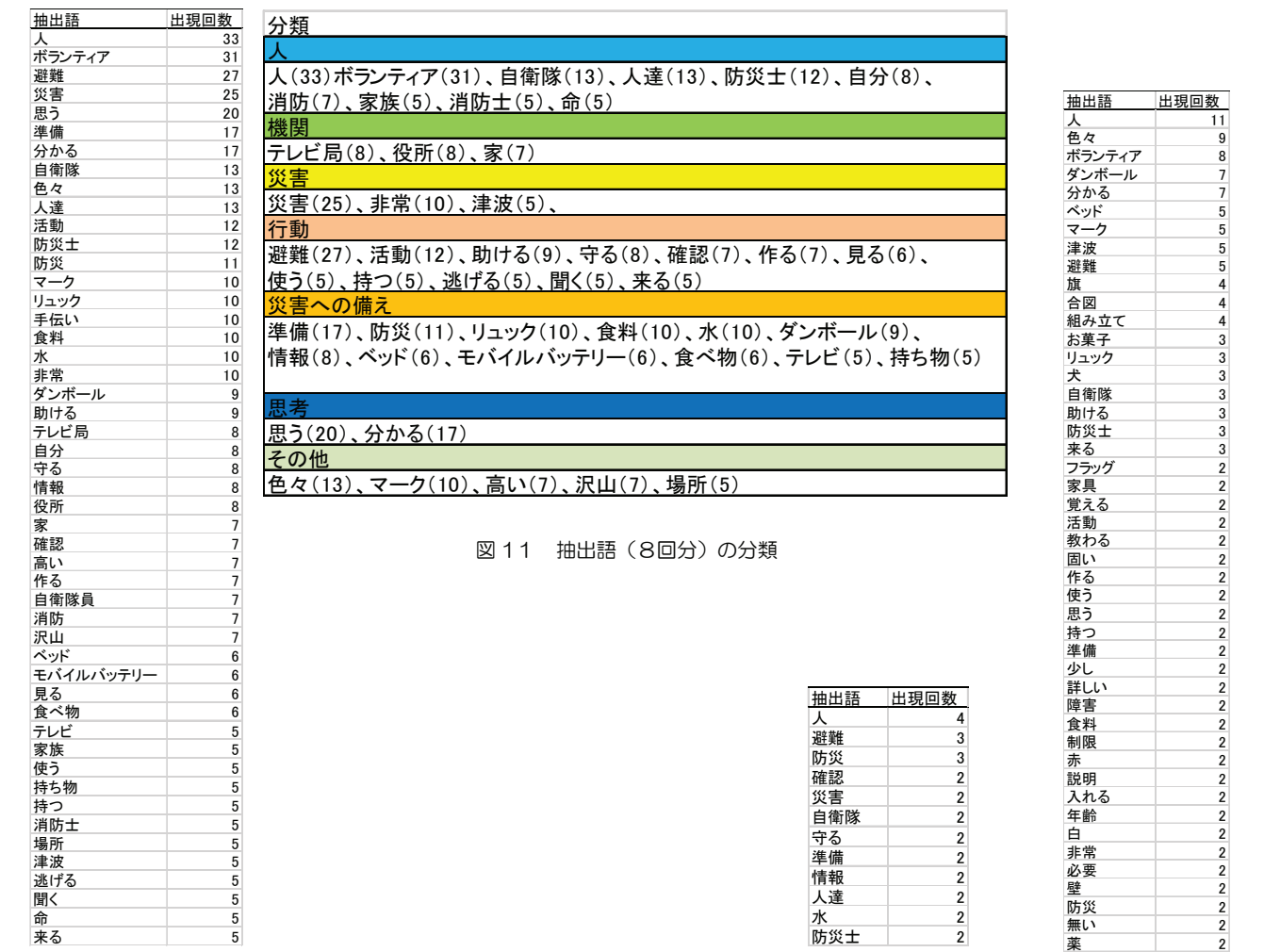


図 11 抽出語（8回分）の分類

図 10 抽出語（8回分）

図 12 抽出語（7月5日前）

図 13 抽出語（7月5日後）

7 学習後の生徒の思考①（まとめ発表資料より）

8月28日の授業において、プレゼンテーションソフトアプリを使い、生徒がまとめの発表資料を作成した。これまでの学習で取り組んだワークシートを確認しながら、①調査して分かったこと、②地域の一員として自分が日々できること、についてまとめた。2名の生徒が欠席したため、9名の生徒が資料作成に取り組んだ。1名の生徒が作成したスライドを図14、9名の生徒が作成したスライドより、②地域の一員として自分が日々できること、を抽出して整理したものを図15に示し、さらに場、取組に分類して整理したものを図16で示した。

生徒が作成した資料の内容から、コミュニケーション、災害時の手伝いや車いすの支援等、災害を起点とした学習から地域の中で自分にできることを考案する生徒の様子が確認できた。また、地域にとらわれず、日常で自分にできることに着目し、天気や災害の情報収集や情報の共有等、日常生活において自分ごととして思考することができていることが確認された。

生徒名
○調査してわかったこと 災害ボランティアは、色んな事をして被災者の支援を行うという事がわかりました
○地域の一員として自分が日々できること 毎日、地域の人とコミュニケーションをとって生活したいです。 [地域の人の手助けをする。] [挨拶やお話をして輪を広げていきたい。] 学校や色んな所でしていきたいです。

図14 生徒が作成した発表スライド

地域の一員として自分が日々できること（生徒が入力した内容を記載）
毎日、地域の人とコミュニケーションをとって生活したいです。地域の人の手助けをする。 挨拶やお話をして輪を広げていきたい。学校や色んな所でしていきたいです。
近所が災害の被害にあったとき助けること。 学校に行った時に天気の話をする。
車イスの人を見かけたら後ろを押してあげる。 知ってる人に会ったら挨拶する。
家の片付け、学校の清掃、地域のゴミあつめ、地域の人とコミュニケーションをとる。
同じ住民に挨拶と手伝いをする。
非常食を持っていきたいです。
地域の人とのコミュニケーション挨拶が出来るように頑張ります。
今、通学中にすれ違った人におはようございますと声を掛けているので続けたいです。
災害に備えて、缶詰やレトルト食品、水を備蓄する。
日頃から、友達や先生、地域の人とコミュニケーションをとることに、取り組んでいきたいです。
毎日天気予報を見る。災害にあった地域がどういう状況かテレビで確かめる。天気や災害の事を友達や先生に伝える。

図15 地域の一員として自分が日々できること（9名分）

場	学校	家	地域
取 り 組 み	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション（挨拶、話） ・清掃 ・天気の話をする、伝える 	<ul style="list-style-type: none"> ・片付け ・非常食の備蓄、準備 ・毎日天気予報を確認 ・災害に遭った地域の状況確認 	<ul style="list-style-type: none"> ・コミュニケーション（挨拶、話） ・手助け（災害時の手伝い、車いすを押す） ・ゴミ集め

図16 図15を「場（学校・家・地域）」・「取組」で整理

V 考察と課題

1 地域資源活用の効果

（1）防災意識

専門性のある地域人材を活用した防災教育の実施により、地域人材との授業後は、防災意識の向上に効果があること、学習した内容を生徒が想起しやすく、防災意識の維持に効果的であることが示唆された。また、地域人材と能動的に関与した生徒群と消極的に関与した生徒群の防災意識の比較から、地域人材との直接的なやり取りを通じて疑問解消や課題解決ができる学習活動の設定が防災意識向上に有効であることが示唆された。

（2）生徒の学びの広がり（発見・探究）

地域人材との関わりや、地域資源を活用した体験的な学習活動から、生徒たちは地域資源への視点が広がり、多様な人の存在の認識や講義、体験活動を通して自分にできることは何かを考え、地域の人とのコミュニケーション（挨拶、話）、手助け（災害時の手伝い、車いすを押す）、ゴミ集めなど、自分にできそうなことを思考する生徒の様子が確認された。また、地域にとらわれず、日常で自分にできることに着目し、家庭での天気や災害の情報収集をしたり学校で友達と情報を共有したりするなど、日常生活において、自分ごととして思考する生徒の様子が確認された。

（3）友達からの学び

図4、図5において、質疑応答における友達と地域人材とのやりとりの様子から学びを得ている生徒が確認されている。地域での学習場面において、普段の学校生活を共に過ごしている友達の存在が学習効果に影響を及ぼすことが示唆された。普段と異なる環境下でも友達と共に学ぶという学習環境の設定が、生徒と地域人材との一対一の構図での学びの拡大につながったのではないかと考えられた。

2 本実践からみえた課題

地域人材からの学びをより日常の生活場面に落とし込むための手続きの必要性が確認された。家で確認した天気予報や災害情報を学校で共有する、学校でも自分が関わる地域でも挨拶等のコミュニケーションを行うなど、生徒が地域人材との学習を通して思考した内容を実際にできるように日常化していくための学習活動の設定が必要である。

3 今後の地域人材を活用した学習活動の設定に向けて

本実践の課題を踏まえ、地域人材を活用した学習活動がより生徒にとって効果的な学びとなるためには、自己の課題解決のために地域人材に学びを求めたり、生徒個人の目標設定（月や一週間の目標等）に関連させたりすることが必要である。つまり、①より探究性のある学習活動の設定を行うこと、②地域人材からの学びを日常の生活場面で実践できる学習活動の設定を行うこと、が大切となる。

本実践では、災害から命を守る視点、卒業後に地域の一員としてどのように生きていくかを探究する視点で学習計画を立案し、教師が地域人材を選定し、生徒は設定された環境の下で学習活動に臨む構図となった。卒後の社会生活が間近に迫っている高等部ではあるが、トップダウンの構図だけではなくボトムアップ

して生徒自身が地域人材とつながりを築くことができるよう、より探究的な学習活動設定の必要性が確認された。自ら地域資源とつながっていく学習活動の設定により、より探究的に、意欲的に地域と関わりながら学習活動に取り組み、自己の課題解決を通して社会生活につながる学びに発展させることができるのではないかと考えられる。

生徒が地域にアクセスしやすく、探究的に自己の課題に取り組んでいけるような学習活動の設定を構想し、学校全体として地域人材との関係づくりを行っていくことが生徒たちの学びに有効と考えられる。

VI 参考・引用文献

文部科学省（2015）『学校防災のための参考資料「生きる力」を育む防災教育の展開』インターネット、
<https://anzenkyouiku.mext.go.jp/mextshiryou/data/saigai03.pdf>（2023/10/27にアクセス）

豊沢純子・唐沢かおり・福和伸夫（2010）「小学生に対する防災教育が保護者の防災行動に及ぼす影響—子どもの感情や認知の変化に注目して—」『教育心理学研究』第58号, pp.480-490.

岩山絵理（2021）「特別支援学校のセンター的機能に関する研究動向—論文タイトルに対するテキストマイニングを用いて—」『愛知教育大学教職キャリアセンター紀要』第6号, 愛知教育大学, pp.45-49.

牛澤賢二（2018）『やってみようテキストマイニング—自由回答アンケートの分析に挑戦！』朝倉書店.